

〈報告1〉

その子らしく伸びる保育をめざして
一ちがいを認め合える仲間作り—

所 属 三木市立上の丸保育所

I はじめに

今年度末をもって閉所する本園は、段階的に入所募集の停止が行われ、5歳児1クラス15名のみとなっている。小さい頃から同じ顔ぶれで過ごしてきたため、友だちの性格をよくわかっている反面、“この子はこんな子”と良くも悪くも固定概念をもちがちで、友だちが困っていても他人事で無関心だったり、「〇〇したらアカンで」と否定的な言葉が発せられる場合があることが、課題である。

個性豊かな15名の良さも課題も含めて、ありのままを受け入れ支え合い、認め合える仲間作りをめざして取り組むことにした。

II 取組

1 保育者の事例研修～人権を視点として、子どもの育ちを読み取る～

幼児期における人権教育を考えた時、日常生活や遊びの中に、人権教育につながる視点、窓口がたくさんある。そのポイントを捉え、見逃さずに子どもたちに投げかけたり、気づかせたりできるかが、とても重要であると感じる。そこで、遊びや子どもの姿から事例研修を職員間で行い、幼児理解をもとに、個々の課題、環境作りや支援の方向などについて、探り高めることをめざした。

(1)事例研修①『アイス爆弾ゲーム』
自粛期間が明け、ようやく全員が

揃っての生活が始まって間もない7月初め。8名がボールをアイス爆弾に見立て、中あて遊び『アイス爆弾ゲーム』をしている途中、A児が一人ぽんと輪を離れ泣き出した。一緒に遊んでいた仲間での話し合いの場面を捉えて、子どもの内面の読み取りや保育者の支援、個々の課題などについて、職員間で話し合った。

令和2年7月2日『アイス爆弾ゲーム』

A児：しおが泣きだして、保育者が泣いてくれる。
T1：泣きだして、しおはみんな？ 声もかけない。
T2：A児も、泣いてるよ？ 声もかけないよ？
A児：うんうん泣きだして、泣いてるよ。
T2：みんなも泣いてるよ、泣いてるよ。
T3：みんなも泣いてるよ、泣いてるよ。
A児：みんなも泣いてるよ、泣いてるよ。
A児：みんなも泣いてるよ、泣いてるよ。

A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。

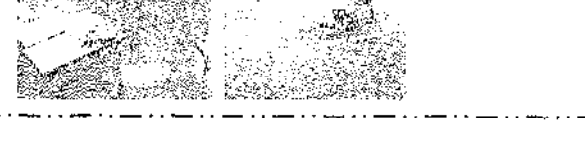
T1：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
T2：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。

T3：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。

A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。

A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。

A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。
A児：泣きだして、みんなも泣いてるよ。



【考察】

遊びの輪から外れ一人泣いているA児の気持ちに気づき、寄り添ってほしいと願い、話し合いの場を設けた。A児は、ボールが当たったC児を円の外に出そうとしたが、当たっていないのに外に出されていると思ったD児が中へ入らせようとしたことに対し、わかってもらえず泣いていた。

その場の話し合いに参加している8名の子どもの姿から、それぞれの心情・個の課題などを読み取り、各々が気づきを出し合う中で、以下の主なポイントが見えてきた。

ポイント① 他人事ではなく、困っている友だちに寄り添い、考え合える仲間関係づくりのためにすべき支援とは？

○当人对保育者との解決ではなく、子ども同士を繋ぐことで、友だちに“わかってもらえた”という安心感、満足感をもてるようにする。

○「押し返さんと、まず聞かなあかんわ」と、気持ちに寄り添い一緒に考え発信することが出来たB・G児など、大いに認め感謝し、クラスに広めることで、自分自身に「こんな良さがある」「これが友だちを大事にすることなんだ」と意識づけたい。

ポイント② 幼児理解と今後の支援は？

○子ども同士の中で、あるいは保育者の中に“この子はこんな子”という固定概念がなかっただろうか？例えば…
・自分の思いが強く激しく主張することが多い＜A児＞に対し、「何言ってるかわからん」と否定的な言葉が出ていたE・F児の言動

・トラブルの発端となったボールが当たった、当たっていないの当事者であったC児には誰もふれなかった。C児に対して「幼くあまり話さないから」「仕方ない」という意識が、みんなの中にないだろうか、など。

まとめ

多人数で改めて事例を振り返ることで、一人では気づけなかった、個々の心情やかかわりの姿、良さや課題などを

を再認識することができた。

(2)事例研修②

前回の事例研修での気づきや支援のあり方を意識して保育をする中で、各自がそれぞれ人権教育を視点とした事例を持ち寄り、シェアをした。

＜事例の一例＞

○遊びのルール理解がゆっくりなC児と周りの子とのかかわり

○ドッジボール遊びの中で、ルールを守れず嫌がる行動をしてしまったI児と周りの友だちとのかかわり

○楽器遊びで、自分の指揮通りに演奏してほしいJ児と周りの友だちの思いとの折り合い

○D児の大切な制作物を隠してしまったJ児と、A児が隠したと決めつけてしまったD児など。

【考察】

事例を糸口に、道徳性や規範意識の芽生えを培い、個々の自己肯定感を高め、互いの良さを認め合える仲間づくりについて、共通理解したこと。

① 子どもの行動の裏にある心の揺れや葛藤を読み取り、その気持ちに寄り添いながら、友だちの思いに気づき、折り合いをつける経験を重ねることを大切にする。

② 個々への支援から、友だち同士、さらにはクラスみんなの育ち合いに繋がる支援へと環境を作っていく。

③ 支援を要する子に対しては、その特性への理解も促しながら、「〇〇が得意だけど、△△は苦手」「～したかったけど、～してしまった」「～すると頑張れるよ」など、言葉にならない行動の意味を橋渡しし、理解し合えるささえをする。

以上のことを、共通理解し合い、さらに保育へ生かしていくようにした。



2 保育実践から

(1) 自己表現・発信が弱いC児

<7月中旬～下旬>

朝の登所時、母親と離れにくく泣くことも多いC児であるが、継続して遊ぶ中で鬼ごっこが楽しくなってきた。是非、この興味を生かし、自信へ繋げたい。

初めて自分から「鬼ごっこ、せーへんの？」と発した一言を逃さず繋げるために、一緒に友だちを誘い、鬼ごっこが始まった。この日のC児の誘いがきっかけで、最後はクラスみんなでの鬼ごっこへと広がり、C児にとっても、クラスにとっても大きな一歩となった。

<9月上旬～中旬>

「鬼ごっこせーへんの？」から「したい！」と一歩前進。今度は、自分から友だちへ伝えられるように後押しすると、鬼ごっこの大好きなE児を誘って鬼ごっこができた。

しかし、鬼になった時に友だちに対する遠慮があり、あと一歩のところまでタッチできずに困り泣き出したC児。B児をはじめ数名が集まる。B児が空気を和らげようと「今、タッチしたらいいやん」と声をかけると、C児は目の前にいるB児をタッチした。B児は“僕？”という感じで苦笑いをしながらも、「よし！」と鬼役になってまた鬼ごっこが再開。友だちとの関係の中で、ひとつずつ歩んでいることを感じる。

<10月上旬>

リレー遊びの際、C児の走りを見たE児が「C君なんであんなに、走るの早いんやろー」と良さを認める言葉を発し「ほんまやな」と共感し合った。ある日の鬼ごっこでは、終了時に捕まって悔しくて寝転んでいるA児に、C児が真っ先に駆け寄り姿にC児の成長を感じた。

【考察】

C児に対しての見方や支援を再考察し、自らが友だちへ発信しかかわる力

を育むための支援と共に、C児を含むクラスの子どもたちとのかかわりの中での育ちをささえることを意識し実践を行った。

育ちの芽を捉え、チャンスを逃さず細やかに支援を続けることで、変容がみられた。友だちとの関係の中で刺激を受け、困ったときに助けてもらったり、自分の思いを伝えられる関係を築ける支援、それはクラスの子どもたちの成長にも繋がることを改めて実感できた。

(2) J児の困り感を生かして「秘密基地鬼ごっこ」へ発展

こだわりが強く、自分の思いを通そうとすることで周りの友だちとの温度差が生じやすいJ児。鬼ごっこをしたい気持ちはあるのだが鬼になることには強い抵抗がある。捕まりそうになるとやめたり、激しく抵抗したりするため、遊びを通じて友だちと心を通わせることが難しかった。

この日は逃げる役で遊んでいたが、捕まるのが嫌で気持ちが逸れかけていた。そこで保育者が視点を換え、「鬼さんと逃げる人と、作戦会議やな」と声をかけると、J児は張り切って「ここは鬼が入られへんことな」とミニコーンを並べ始めた。保育者が本児の行動をプラスに捉え、「おっ！秘密基地ができたね」とJ児の発案を生かして他児にも広めたことで、“疲れたら秘密基地で休憩できる。鬼は入ることはできない。ずっと休憩はダメ”という新しいルールが生まれ、「秘密基地鬼ごっこ」に発展し、J児も心が折れることなく楽しめる遊びとなった。

【考察】

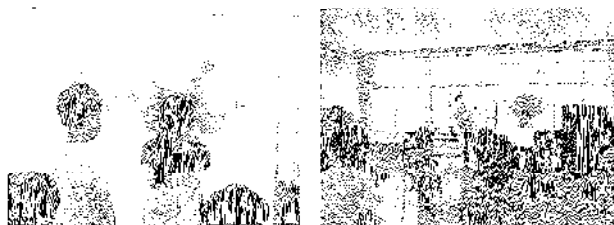
周りに合わせるだけでなく、J児の困り感を理解し、そこに寄り添いともに楽しめる方法を探っていくことは、個々の育ちにとっても大切なことである。“ルールを守らなくてずるい”ではなく、“これならみんなが楽しめるね”という空気感、受け止め合える関

係づくりをさらにめざしたい。

3 子ども人権教室～「ぼかぼかとちくちく」～

絵本『ちくちくとふわふわ』（なないろ：絵と文）の読み聞かせと共に、生活の中で、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを考え発したりする「ことば」について考える機会をもった。保育者が創作したペープサート『ぼかぼかハートの木』を見る機会を作る。主人公が友だちに言われて嬉しかった「ことば」により、心の中が温くなる「ぼかぼかハート」が生まれ、ぼかぼかハートの木にたくさんの実がなる内容で、心がふわふわぼかぼか嬉しくなる言葉と、ちくちく悲しくなる言葉について考えた。

見た後、「みんなならこんな時どうする？」と実際の保育所生活で起こる出来事と置き換えながら、みんなで友だちが嬉しくなる、元気になることばを考え、ぼかぼかハートの木が、あたたかい言葉でいっぱいになった。



【考察】

人権教室の機会を生かし、「ぼかぼか」「ちくちく」が合言葉となるよう、クラスで意識し合うように努めた。日常の色々な場で、子ども同士の会話の中に「今の、ちくちくや」という会話が聞かれるようになった。

今回の子ども人権教室をとおして、子どもたちが、自分にとっても友だちにとっても嬉しい言葉の大切さを実感し、その心とその後の生活に広がりつつあることを感じられた。また、保育者は、子どもの言動の中で自信をもって自己表現している子どもの姿や友だちへのやさしさなどを見逃さずに認め、クラスへ発信することを積んでい

くことで、心地いい言葉・関係を築くことに繋がると感じた。

III まとめ

事例研修をとおして、職員間で改めて一人一人の幼児理解を深めるべく研修を重ねたことで、自分だけでは気づけなかった視点や支援の方向性に気づくことができた。さらには、子ども同士を繋ぐ言葉がけを意識し、友だち同士のかかわりの中で生まれる育ちの芽を、見逃さず認めたり共に考えたりする機会を意識し保育を行った。

遊びや生活の中で、友だちと思いを伝え合い受け止め合う経験を重ねる中で、友だちの困り感に寄り添ったり、良さを認めたりしながら、子どもたちがそれぞれのペースで、その子らしく成長する姿を実感することができた。

これからも、保育者自身の人権感覚を磨きながら、さらに子どもの内面や行動の奥にある子どもの心を読み取り、子ども同士の心が繋がりに合えるクラス作りをめざして取り組んでいきたい。

IV 実践報告者からの質問

子ども同士のかかわりの中で、否定的な言動や表現が気になると感じた時、どのような働きかけや支援をされていますか？

<報告2>

小さな命を守るため…今できること

所 属 社会福祉法人正志会
清心緑が丘認定こども園

I はじめに

第1分科会(就学前教育)では、「就学前の豊かな心を育むための教育・保育内容を創造し、実践しよう。」をテーマに、3つの討議課題がある。

- 1 保護者や子どもの生活実態から、子どもの成長を阻害している要因を明らかにし、どのような教育・保育内容を創造しているか。
- 2 保育所・認定こども園・幼稚園・小学校と家庭との連携をどのように図るか。また、一貫した指導をどのように実践しているか。
- 3 保護者に対する啓発活動をどのようにすすめているか。

例年こども園では、様々な感染症に対応して研修や実践を行ってきたが、教育・保育を行うことができなくなる事態までを想定することはなかった。ウイルスへの対策・感染など、連日の報道に不安が募る日々の中、緊急事態宣言が発出された。園生活や園行事を見直す中で、今回の実践報告をどのように進めていくか園内で話し合い、「子どもたちの命を守るために、試行錯誤を繰り返し取り組んでいる『感染症予防策』について発表をしよう」と考えた。課題に対する具体的な取組として、

- (1) 予防策
- (2) 正しい清潔衛生習慣づくり・定着化
- (3) 家庭との連携

について、年齢を考慮しながら、今取り組んでいる予防策についてまとめた。

II 具体的な取組

1 予防策(3密を避ける)

- (1) 密閉空間を作らない→各保育室や日常生活を行う場所は常に窓を開け、換気扇を使用し換気をする。
- (2) 密集を避ける→例年全園児が集い行っていた毎月の誕生会や避難訓練等の行事は、各クラスや年齢に分かれ、少人数での取組に変更する。
- (3) 密接を避ける→マスク・フェイスシールド・パーテーションを利用し、飛沫感染予防を行う。

(子どもの姿)

4月当初、ニュースでよく聞く“新型コロナウイルス”という言葉をよく口にしていた。急に变化した生活スタイルも柔軟に受け入れることができ、なぜマスクを着用するのか、なぜ全員で集まれないのかを、よく理解できていた。6月から教育・保育が始まると、自粛期間からの生活の変化に不安を見せる子どもの姿もあったが、今ではすっかり慣れ、予防対策が身に付いている。

<考察>

3密を避けることが予防の基本であると全職員が共通理解した上で、活動内容や年齢に応じて工夫が必要だと感じた。



2 正しい清潔衛生習慣づくり・定着化 (マスク・手洗い・消毒)

- (1) マスク作り→自粛期間中に、子ども1人に2枚のマスクが配布できるように、職員でマスク作りに取り組んだ。1枚は家庭に配布し、もう1枚はマスクを未着用で登園した場合に個別使用できるように、クラスで保管をしている。



3歳以上児は、保育室や遊戯室での集い・園バス乗車時等は必ず着用する。(2歳児は、バスに乗るとき。0・1歳児は着用しない。)
(子どもの姿)

4月当初は、慣れないマスクに子どもも大人も苦戦し、「暑い時・苦しい時は外す」「マスクをずらしているときは息苦しい時」と、保育者側が理解し、戸外で広がって遊ぶ時は、マスクを外すなど、無理のない範囲でマスクの使用を行った。

暑い夏を無事に越え、マスク着用は今では当たり前になり、自主的に着脱をしている。異年齢で過ごしている時、なかなか上手く着用できない年少児を手伝い、優しく付けてあげる姿も見られる。自分だけでなく周囲の友だちにも視野が広がっている。

<考察>

2歳児は、日常的にマスクを着用することは安全面に難しい点があるが、バスに乗るときや誕生日会など、一つの空間に集まる時のみ着用し、次年度に向けて取り組んでいきたい。3・4・5歳児には紙芝居やペープサート・エプロンシアターを通じて、清潔衛生習慣を伝え、マスク着用を理解し定着するようこれからも伝えていく。



(2)登園時の手洗い→インフルエンザや

ノロウイルス等が流行する冬期に行っていた「登園時の手洗い」を、季節に関わらず毎朝の入室後に励行する。

ア 0・1・2歳児は、保育者が一緒に手を添えて手洗いを行う。

イ 3・4・5歳児は、自主的に手洗いができるように声かけをし、見守る。

(子どもの姿)

最初は入室後の手洗いよりも遊びが気になり、手洗いを忘れていた子もいたが、保育者の呼びかけにより、手洗いの習慣が身に付いてきた。ポスターの手順を確かめながら真剣に取り組む子どもや、歌やリズムに合わせて取り組む子どもなど、様々な姿が見られる。

<考察>

手洗い場に手洗いの手順を示したポスターを掲示しておくことで、絵や文字を見て取り組むことができた。また、手洗いにリズムを付けて、歌いながら行うことで、あそび感覚で楽しみながら実践できるようになった。子ども一人一人が清潔衛生習慣を身につけ、自発的に取り組んでいる。

(3)園内研修として、自粛期間中や保育再開前に衛生管理についてマニュアルを新たに見直し、全職員の研修を行った。消毒→手指消毒にはアルコール、机や清掃にはノロウイルス流行時や嘔吐処理に使用する次亜塩素酸水を使用している。

ア 手指消毒は、登園時や戸外活動後、トイレ後や食事前など適宜行う。

イ 保育室の子どもがよく触れる所(トイレの手すりやレバー・入口の扉・ロッカー等)は、1日1回拭き取りを行う。

ウ その日に使用した玩具は拭き取り、日光消毒を行う。

エ 清掃に使った雑巾は、除菌してから洗濯する。

3 パーテーション

(1)パーテーション→保育者の手作りで、卓上簡易隔離パーテーションを作り、食事・製作・おやつ等で、テーブル活動をする際に使用している。

- ア 主に3・4・5歳児クラスで利用し、テーブルには1台につき着席3名までと人数制限をしている。
- イ 食事をする人数をクラスの半数とし、少人数ずつ交代で食べる。
- ウ 極力対面に座ることは避け、横並びに着席する。



(子どもの姿)

初めて使用した際には興味津々で、自分の前へ置こうと引き寄せ、遊び道具のように扱う子どももいた。使用の目的や方法を丁寧にくり返し伝えることで、子どもたちも感染予防に必要なもので遊ぶものではないと理解している。今では対面に座る際にあって当然のもので、特別意識している様子はない。

<考察>

透明の素材を使用しパーテーションを作ったことで、対面の友だちの顔も見え、閉鎖的になることなく対応できている。子どもたちもマスクを外している際は、会話を控えられるようになった。

4 ソーシャルディスタンス(2歳児)

(1)一人用マット→2歳児クラスで50cm×50cmのマットを用意し、その上で遊びを楽しむことで、自分の遊びを深めながらも一定の距離を保てるようにした。

ア 好きな玩具を選び、マットの上で遊びを展開していけるように声かけをする。

イ 保育室を広くし、マットを広げておくことで、遊びのスペースを知らせる。

(子どもの姿)

色とりどりのマットがあり、その日の気分で自由に選んでいる。当初はマットの上で遊ぶことが理解できず、取り合いになることや、ぬいぐるみの掛け布団として使用し、玩具の一部となっていた。子どもたちのアイデアを認めながら、遊び方を伝えていくことで、長時間マットの上で遊べるようになり、友だちとの距離を保ちながら集中して遊んでいる。

<考察>

ふれあいが大切な2歳児にとって、マットを使った遊びの主となる目的は、遊びを楽しむことで、その副次的効果としてソーシャルディスタンスが保たれればと思い、保育に取り入れてきた。時には目的と違った遊び方になることもあるが、子どもの自立や発想も大切にしながらマットを使用している。



5 フェイスシールド

(1)フェイスシールド→主に0・1・2歳児クラスの食事介助時や、全クラス歌唱指導の際に使用する。

ア フェイスシールドの縁にマスキングテープを貼り、子どもが近付いた際にけがをすることがないように保護をする。

(子どもの姿)

マスク着用時は、保育者の表情が伝わりにくかったが、特に0・1・2歳は、フェイスシールドを利用することでコミュニケーションが取りやすくなった。給食の際、「モグモグ」「カミカミ」等の言葉がけと共に模倣ができるようになった。

毎日の歌の時間では、聞き取りにくい歌

詞や聞き間違えたまま歌うこともあったが、保育者の口元が見えるようになり、言葉を知り自信をもって歌えるようになった。

<考察>

保育者の口や動きに興味を持ち、発語を習得していく0・1歳児にとって、視覚的な口は必要と考え、保育者のフェイスシールドやマウスシールドを取り入れた。保育者の口を初めて見た時、0歳児はじっと見つめ笑顔を見せてくれた。

全クラスで感じたことは、保育者の豊かな表情が子どもたちに伝わったことだ。保育者の「目・眉」の動きだけでは、乳幼児期の子どもたちに表情が伝わりにくく、正しい発語につながりにくい点や聞く力だけで物事を理解するには、個人差が大きいと感じた。

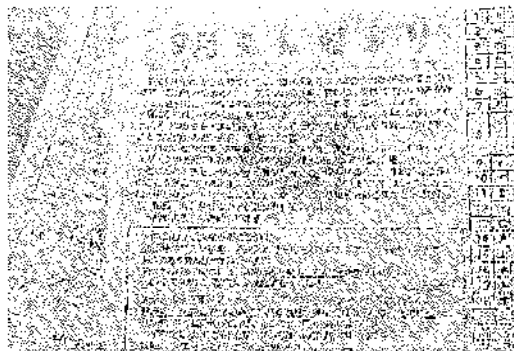
使用する保育者も最初は慣れず、距離感の分かりにくさや、光の反射に目の疲れを感じたが、マスク着用時よりも子どもとのコミュニケーションがスムーズになった。



6 家庭との連携

登園時は、保護者・子ども共にマスクの着用をお願いし、毎月の園だよりでも繰り返し呼びかけている。登園・降園時に、正しい清潔衛生習慣が、子どもや家庭に定着していることを見ることができる。

毎日の検温・記録を行いつづけることは、0～5歳の子どもを持つ家庭にとって、簡単なことではないと思う。解熱後1日以上経過してからの登園の目安など、三木市からの文書も配布しており、今年度はこども園での「感染症」の流行が少ないことは、清潔衛生習慣の定着と保護者の日々の協力の賜物であると感じる。



子どもたちは、家庭からお気に入りの柄のマスクを着けて登園し、友だちと見せ合う姿が見られる。保育の中で、戸外遊びから戻った際に、マスクを着用し忘れた友だちを見つけると、「マスク忘れてるよ」と教えてあげられるようになった。家庭とこども園が協力していったからこそ、子どもたちに多くのことが身についたと思う。

Ⅲ おわりに（成果と課題）

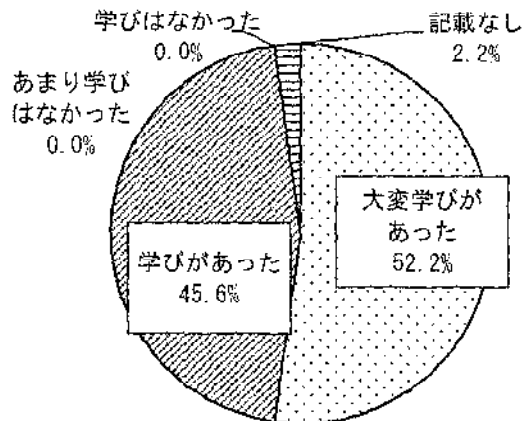
どの取組も、子どもたちだけではなく、保護者や保育者にとっても初めてのことで、戸惑うこともあったが、各家庭への連絡や年齢に応じた関わり・環境構成を行うことで、感染予防が当たり前になり、自然と身に付けることができた。慣れてきた頃に、疎かになってしまうこともあるので、これからの冬の季節に向けて、気を引き締め感染予防に取り組んでいきたい。

新型コロナウイルス対策は、誰もが初めての経験であり、園内でも何度も話し合いを繰り返し取り組んでいる。季節によって、また感染拡大状況によっても異なってくるが、集団生活に必要な最善の予防に努めたいと思う。今後も安心して登園できる環境を作り、子どもたちの笑顔と健康を守っていきたい。

Ⅳ 実践報告者からの質問

各こども園・保育所・幼稚園では、感染症予防でどのような取組をされていますか。全体で取り組んでいることや、年齢ごとに違う取組など、様々な意見をお寄せください。

イ 学びの深度



ウ 感想

- ・子どもと接する大人・保育者の人権感覚・感性などが大きく影響するため、日々意識を高くもって、感覚を磨き、高めていかないといけないと思いました。
- ・子どもたち一人一人の個性、特性を理解したうえで子ども同士をつなげる支援について、改めて考える機会となりました。
- ・就学前の大切な時期に、遊びの中から子どもたちが学ぶこと、友だちと分かり合い、子どもの成長に繋がっていくことを実践の中から大いに感じる事ができました。
- ・保育者同士で共通理解することで、いろいろなことに気づけるんだと思いました。
- ・一人一人に合った支援をしながら、子ども同士で考えたり、意見を出し合ったりすることも大切に尊重し、成長を見守る保育が素晴らしいと感じました。
- ・保育者が児童の声を拾って、人を思いやる心や考える力を育てており、あくまで児童主体で学びが深まっている姿が印象的でした。
- ・人権教室として、わかりやすくペープサートを用いてされているのを知り、心の「ちくちく」「ぼかぼか」もわかりやすいので、当園でも実践したいです。
- ・「個性を認め合う友だち関係」と「子どもの命を守ること」をテーマにまとめられており、大変勉強になりました。
- ・“この子はこんな子”という固定概念がついてしまっているかもしれないこと等、自分の保育やクラスの様子を改めて見つめ考え直す機会となりました。
- ・日常生活や遊びの中で、人権教育につながる場面を逃さず子どもたちに働きかけをされていて、先生方の意識の高さに、保護者として感銘を受けました。
- ・自己表現が難しい中、子どもたちの心の思いにまで耳を傾け、関わり合って成長できるように、丁寧に仲立ちをされている様子に刺激を受けました。
- ・自分を大切にしてもらえぬ心地良い場所があり、安心感を当たり前にもっていきける環境や仲間をつくっていくことは大切だと改めて感じます。
- ・子どもの変化、成長を的確にとらえ温かな見守りについて事例研修を通してされていることに大変学ぶことができました。保育所のチームワークの良さを感じました。
- ・教師の人権感覚を磨くためにいろいろ工夫し、共有されていることが分かり、勉強になりました。
- ・保護者の立場からですが、子ども同士のやり取りや遊びの中で一人一人をよく見て、その子の成長や課題解決のチャンスを逃さず導いてくださっていることに感謝しています。
- ・視点を变えることで子どもの行動をプラスに捉えることができる。大人にも言えることだと思えます。
- ・「その子らしく伸びる保育をめざして」を考えながら保育者が一人一人の姿をしっかりと捉え「あたたかい言葉」「あたたかい心」を伝える様子がよくわかりました。
- ・他所園の人権における保育の取組を知ること、新しい気づきや学びにつながり、自分自身の中で保育を見直すきっかけになりました。
- ・自分だけでは視点や支援の方向性に気づかない、分からないといったことも第三者の言葉や職員間での話し合いで分かることもあると感じました。
- ・子どもの力を信じて、「どうしたら良かった

- のか」を考える機会を何度か設け、その度に子どもたち自身が自分の言葉で伝え合っていて、素敵だなと思いました。
- ・0、1歳児は0、1歳児なりの友だちとの関わり方があって、必要な援助も変わってくるので、適切に援助していかないといけないと改めて感じました。
 - ・“ふわふわ言葉”“ちくちく言葉”の意味が分かりやすい絵本があると、自然と心に入ってくるのではないかと思います。本園でも是非試してみたいです。
 - ・それぞれの保育所や幼稚園で行っている人権についての実践は、小学校（特に1年生にとって）にも引き継いでいくべきだなと考えます。
 - ・感染予防の為に仕方がないではなく、工夫を重ねながら、子どもたちに必要な経験を積めるようにされていることがよくわかりました。
 - ・コロナ禍の中、子どもたちの大切な命を預かっている私たちができる事は何か、新しい生活・保育様式を考える必要を感じました。
 - ・コロナウイルスだけでなく、インフルエンザやノロウイルス等の感染症にも十分注意していきたいです。
 - ・床にマットを敷き、マットとマットの間隔をあけ、その上で遊ぶことでストレスなく密を避けながら遊べる所が良いと思いました。
 - ・感染症対策について、園内で何度も話し合いをされ、より良い対策を模索されているところが素晴らしいと思いました。
 - ・学年ごとの感染対策の徹底、年齢に合わせたできる範囲の予防策をいろいろ知ることができ、学びになりました。
 - ・他園での感染症予防対策について細かく知ることができ、自分のクラスの予防策を見つめ直すいい機会となりました。
 - ・コロナウイルス対策についても、三木市内等の園学校で情報共有していくことが大切だと思いました。
 - ・コロナ対策を子どもたちと共に取り組み、子ども自身が意識して行動していけるようにしていきたいと思います。

- ・フェイスシールドの有用性もわかり、学びがありました。
- ・感染予防対策では、慣れてきた頃に疎かになることはありえるので、みんなが安心・安全で過ごせる環境づくりに努めたいです。
- ・パーティションの設置での「使用の目的～くり返し伝える」から、子どもの納得感を大事にしたいと思いました。
- ・3密を避けることで子どもたちの経験が欠けてしまうことがないよう、工夫やアイデアを重ねていきたいです。
- ・コロナから守るしつけを実践し、あたたかく見守りながら、人権を大事にする芽をうまく育てていただいていることに感謝します。

エ 実践報告者からの質問に対する回答

(ア) 報告1の質問に対する回答

- ・家庭で十分に甘えたりできているか等も考え、こちらからの言葉かけを増やしたり一緒に関わる時間を少しでも多くもつようにします。
- ・保育者自身が子どもたちに対して知らず知らずのうちに偏った見方や言葉を発していないかをふり返ります。
- ・相手の子どもが、どう感じているか気づけるように、表情に注目できるよう声かけをして、好ましい行動がとれるよう促します。
- ・何故そう思ったのかを聞き、まずは気持ちを受け止める。その後、相手の気持ち、その時の状況を一緒に理解し合うようにします。
- ・背景を読み取りながら、心の奥にある不安定さからくるものであれば、その支援をします。
- ・気持ちを認めるが、相手が悲しい気持ちになることを伝える。子どもたちと共に考えます。
- ・普段から、肯定的な言葉を大人が意識をして使って、モデル(例 どいて→通して等)を示していきます。

- ・園児たちは固定観念があるので、日頃から友だちの良いところ探しが行えるよう、誕生会で誕生児の良いところを発表するなどしています。
- ・先生が直接でなく子どもと子どもがつながる手だてをされているなと思いました。
- ・クラス全体で考える時間や場を確保して取り組む。今度肯定的な関わりができた時に認め、心地良さに寄り添います。
- ・保育者の側がプラスに捉えフォローすることが大切だと気づきました。
- ・絵本の読み聞かせが、絵本のお話に親しみ、登場(人)物に心を寄せることで、人の気持ちを考えたり思いに心を寄せる力に繋がっていくと思います。
- ・子どもたちで気づき解決できるように、しばらく子どもたちのやり取りを見守ります。
- ・私はクラスに「言われて嬉しい言葉」「言われたら悲しい言葉」を子どもたちと考えます。
- ・相手の気持ちに気づかせながら、“今”の瞬間をピンポイントでしっかり認めていきたいと思います。
- ・保護者と子どもの姿や支援の方向性なども話し合い、家庭とも連携していきたいと考えます。
- ・“否定的”に表現するのは、根本的な信頼関係を要求していると感じます。その子が“たっぷり感”を味わえるような関わりをします。
- ・生活活動内の安全面の配慮が重要ポイントです。子ども同士のトラブルは、危険な事などはもちろん考慮した上で、大きく育ちと捉えます。
- ・自尊心を高めていける言動を支援者自身心掛けています。
- ・子どもの言葉には、その意味を知らないで使うこともあるので、「ぽかぽか・ちくちく」と同じようなうれしい、かなしい気持ちを書いて貼るなどしていました。
- ・自他分離ができていないので、その影響について周りを見渡させて教えています。

- ・否定的に言われてしまう子の良さを見つけ、友だちやクラス全体に広げていくようにします。
- ・「今の言葉、こわかったな」「胸がドキドキした」「悲しくなる」など、よくない言葉であることを気づかせる。肯定的な表現に言い換えていきます。
- ・「優しい友だちがいてよかったね」と相手の子に共感して子どもをつなぎます。
- ・保育者自身が肯定的な言葉を使い、前向きな言動を多くピックアップしていきます。
- ・乳児の場合は、言われた子どもの気持ちを保育者が代弁して伝えたり、「〇〇くん悲しい顔してるよ」と表情で相手の気持ちを知らせます。
- ・家庭で認められる体験が少なかったり、小さな優越感でお山の大将になっている場合もあるので、自尊感情をもたせます。
- ・子どもたちは周りの大人から関わり方を無意識に学んでいると思います。まずは保育者同士の会話や保護者との関わりにも常に相手を認める言葉を使います。
- ・「今のあなたのことばをきいて、つらいなあとおもったよ。そのことばはいいとおもうかな」「どんなきもちを、どんなことばでつたえたらいいかな」とたずねます。
- ・最初からダメ出しをすると子どもは否定的感情だけが残って「何がいけなかったのか」がわからないと思います。
- ・「チクチク言葉」「トゲトゲ言葉」や心が傷つく子どものイラストを提示して視覚的にも伝えていきます。
- ・何か不安なことがあるのではと思うので、1対1で話し合い、保護者にも伝えてみます。

(イ) 報告2の質問に対する回答

- ・手洗い場でも混雑しないよう、待機する場所を表示。夏場だけでなく、各自水筒を持参してもらう。なるべく少人数で活動するようグループに分かれたり、スペースを広く使います。
- ・コミュニケーションやスキンシップはとても大切なことなので、机、パーテーシ

- ・ ヨン、場を区切る、広く使うなど、物的な環境で密を避けることです。
- ・ 午睡用の敷布団が共用なので個人のタオルケットを敷いたり、布団をこまめに天日干しするなどの対策を行っています。
- ・ フリーの保育室を使用する。安心して預けてくださるようになります。
- ・ 給食や製作活動の時、斜め向かいに座り、真ん中にパーテーションを置きます。
- ・ 紙芝居やシアターを通して、コロナの正しい知識を知らせます。
- ・ 毎日の検温、おもちゃの消毒、やかんをあまり共有しないようにします。
- ・ 毎日の健康記録カード・屋内は2方向の窓を開け換気(エアコン使用時も少し窓を開ける)・午睡は頭の位置をずらします。廊下を利用します。
- ・ 登園時に保護者には園内に入っていないようにしています。
- ・ 毎日のおもちゃや使用物は、週末に天日干し。マスクケースを製作し使用します。
- ・ 2歳児は歌の時など少しずつマスク着用。保育室の窓やドアなどは毎日消毒します。
- ・ 戸外だからこそ大きな声を出したり、子ども同士が密にならないようにします。
- ・ 生活発表会では、クラス総入れ替え、参加者2名までとします。
- ・ 子どもの健康管理として「早寝、早起き、朝ごはん」で体調を整えるように家庭に呼びかけています。
- ・ 1歳児の対応に困難がある。マスク・ソーシャルディスタンスなどで日々悩んでいます。
- ・ 日々の意識づけ・声かけは大切にしています。ソーシャルディスタンスのため、遊びの中でもフープなどで自分の場所を作ったりして間隔をあけています。
- ・ 手洗い場など、並んだ時に足形や輪を置いて、距離を取って並べるようにします。
- ・ 免疫力を高めるための運動遊びの充実。栄養のある食事の摂取(学校給食、家庭への働きかけ、食育だよりなど)をします。
- ・ 保護者参加の行事は、参加証を作って万

が一にそなえました。ビデオ撮影やクラスごとの参観など、保護者行事も工夫しました。

- ・ 子どもの成長や個性に対応していることが人権教育の深化につながると思います。感染者が現れた時の対応を考えます。
- ・ 配膳台の拭き方を、オスバン→アルコールだったのをアルコールで2度拭きすることにしました。
- ・ 4歳児は部屋を2つに分けて利用。5歳児はレジャーシートを用いて一人一人離れたところで食べるようにしています。
- ・ 行事については、保護者参加の場合、完全入れ替え制(クラスごと)で密を避けています。
- ・ 遊んでいるときの子ども同士の距離感(距離感)は難しく、工夫が必要であることを感じます。
- ・ 家でもできるように声をかけています。リモート誕生会を行う。職員間の連携をしっかりとります。
- ・ 登園時の検温、マスクでの生活には慣れつつあるが、表情などは汲み取りにくいです。
- ・ 運動時に使った道具の消毒、カードゲーム等の後も手指消毒をして予防に努めています。
- ・ 小学校では、感染症に対する考え方や人権感覚と一緒に指導しています。(感染症にかかった人がいたら、その人に対してどう接するのかなど)
- ・ ウイルスへの対処を習慣化し、家や他の場所でも、さらに大人の気のゆるみにも気づけます。

オ 指導助言

(7) 評価と課題

上の丸保育所は、「その子らしく伸びる保育を目指して」をテーマとして実践を重ねた。取組として、1.事例研修の中で、人権を視点とした育ちを読み取る 2.保育実践の中から、個々のちがいを良さとして他児に広めていく支援を全職員で共有す

る 3. 人権教室として、絵本「ちくちくとふわふわ」や創作絵本「ぼかぼかハートの木」を見る機会の設定するなど、子どもの内面や背景を丁寧に読み取り、園全体で幼児理解を深めようと努力した。

清心緑が丘認定こども園は、「小さな命を守るため…今できること」をテーマとして、新型コロナウイルス感染症対策に取り組んだ。取組としては、1. 予防策（3密回避）2. 清潔衛生習慣づくり（マスク、手洗い、消毒、パーテーションなど）3. 家庭との連携（検温記録、園だよりでの啓発）について実践した。安心して登園できる環境づくりのためにさまざまな工夫が見られた。

(イ) 感想のまとめ

上の丸保育所の実践に対しては、「子どもと接する保育者の人権感覚が子どもの成長に大きく影響するため、意識を高くもち感覚を磨いていく必要がある」「自分だけの視点では気づかないことも、全職員で見ることによって気づきが広がる」と自己研鑽の大切さに改めて気づいたとの感想が多かった。

清心緑が丘認定こども園の実践に対しては、「コロナで経験ができないのではなく、工夫しながら必要な経験を重ねられるようにしたい」など、大切な命を守るために新しい生活様式を子どもと共につくっていききたいという前向きな感想が多かった。

(ウ) 質問回答から

上の丸保育所からの質問は、「否定的な言動や表現が気になると感じた時はどうするか」であった。主な回答として、「気持ちを受け止め、相手の気持ちや状況と一緒に振り返る」「子どもの背景を読み取り、心の奥にある不安が緩和できるように家庭と連携する」「子どもに対して肯定的な見方をする」など、子どもを深く理解しようとする姿勢が伝わってきた。このことは、子ども理解の上で忘れてはならないこと

である。

清心緑が丘認定こども園からの質問は、「感染症予防についての方法を教えてください」であった。主な回答として、環境構成の見直し（手洗い場の待機場所、布団の敷き方、換気、人数制限など）、可視化した表示（手の洗い方、足型表示など）、子どもへの意識づけ・保護者への啓発（ペーパーサート、配布物など）が寄せられた。園の実情に合わせて、命を守るための工夫を日々重ねていることが伝わってきた。

(I) 助言

上の丸保育所は、生活の中で子どもの姿を丁寧に読み取ることに関心があったことが素晴らしかった。子どもの姿を表面的断片的にとらえるのではなく、成育歴などの背景も心におきながら、肯定的に子どもの今を読み取ることができるよう努力された。全職員が子どもの心を読み取ること大切にする中で、自己肯定感が育ち、徐々に豊かな心の基礎が育っていきと考える。上の丸保育所は、本年度で閉園となるが、その子らしく伸びる保育をめざした実践や肯定的なまなざしが今後もすべての園で引き継がれることを願う。

清心緑が丘認定こども園は、新型コロナウイルス感染症予防について誰もが未知の世界を経験する中、どうすれば「小さな命」を守ることができるのか、今できることは何なのかと、試行錯誤を繰り返しながら実践された。適時性のある実践で、市内の先生方にとって「知りたい、けれども交流がもてない」というもどかしさや不安感が、この実践で少しは解消できたのではないかと感じた。

今年度は紙面発表となったが、豊かな学びの場となったことは確かである。今後も時代の状況に合わせて、就学前の豊かな心を育むための教育・保育内容を創造し、実践できるように真摯な姿勢で子どもに向き合い、柔軟な心で研鑽を重ねられるように願う。